

「個別最適・協働的」な学びを支えるもの

西部教育事務所 管理主監 古市 功

令和3年度もゴールが見えてきました。残念ながら今年度も続いてしまったコロナ禍の1年でしたが、西部管内の全ての教職員の皆様の力が、学校の安心安全を守り、児童生徒の健やかな成長を支えてくれました。心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。特にこの1年は、新学習指導要領の全面実施、一人一台端末の導入など、教育の大きな転換期の中であって、日々の教育活動に多くの工夫・改善が図られました。私が見聞きした中で、特に印象的な姿をいくつかあげると…

○PCで情報共有した後に、児童が輪になってタブレットを囲み、生き生きと自分の考えを述べ合っている姿
○タブレット端末を活用して、不登校生徒が授業の参観、相談室での会話、教室で友達との会話と成長する姿
○ICTを活用した研修をきっかけに、若手が機器の操作をベテランが授業づくりを教え、互いに学び合う姿
ニューノーマルな息吹の中で、新しい学校文化がたくさん花咲かせた1年となりました。

さて、話は変わりますが、先日、教員になったある教え子と話をしていたら、「先生、中3の〇〇の時に先生が〇〇〇〇って言葉をかけてくれて、やる気が出て～～（以下略）。」適当に相づちをうちながら、必死に思い出そうとしましたが、全く記憶の片隅にもありません。その一言の会話の場面をまるで昨日のこのように楽しそうに話す彼女の姿を「ポカーン」と眺めながら、改めて、教員の一言の大切さを痛感しました。今となっては30年以上前の青年教師がどんな話をしたのかは分かりませんが、当時、勉強の苦手な生徒を相手に朝や休み時間、放課後と繰り返して漢字や計算ドリルをしたこと、クラスの全児童が逆上がりができるまでいっしょに休み時間に特訓したこと…。学校組織の中で大した活躍もできなかった私にできたことは、子供といっしょに学び、いっしょに遊ぶことしかありませんでした。その過程で一人一人の子供の表情や態度の変化を見逃さないこと、できたことを共に喜ぶことの大切さ、そんな教員としての基礎を学んでいたような気がします。

平成の時代を経て、令和型の新しい学びの方向性として、ICTの機能を最大限に活用しながら「個別最適化した学び」と「協働的な学び」の両立が求められており、西部教育事務所でもそうした授業モデルや研修を広めています。しかし、間違っただけとはいけないのは、AIドリルが個に応じた進度ですすめてくれるのが「個別最適化」、情報共有ソフトを活用して意見を提示し合うことが「協働的」なのではありません。チョークとトークの時代から、タブレットとゲー●ルの時代になっても、教員として大切な変わらないものがあるはずで

「不登校のあの子になんとか学校の様子を知らせたい!」「この子の計算のつまずきはどこだろう?」「私の授業で活発な討論にならないのはなぜだろう?」。私たち教員が一人一人の児童生徒の成長を心から願うそのために自分の授業力(指導力)の向上を目指すことが「個別最適・協働的」な学びの源泉であると思います。どんな時代にあっても、どんな道具を使っても、AIが教員の理想を超えることはあり得ません。子供の成長を願い、質の高い学びを求める教職員一人一人が学校教育の柱です。西部教育事務所では、そんな頑張る皆さんをこれからも力強く後押ししていきます。どうぞよろしくお願いたします。

組織的な業務改善の紹介

船が向かう先は
風や波ではなく
「帆」で決まる

「慣例を打ち破らなければ、時間を生み出すことはできません。」
昨年の6月、管内の中学校を訪問し、働き方改革についてお話を伺った際に、校長先生がおっしゃっていた言葉です。この学校では、まず朝学習を廃止し、校時表の見直しを行いました。次に年間を通じて完全下校を早め、夏季総体前の7月でも完全下校は17時45分としました。

これにより生徒にも教師にも放課後の時間を生み出すことができました。結果として、部活動の時間は短くなりましたが、限られた時間の中で成果が上がるよう、先生方が効率の良い活動を考え実践しているそうです。部活動が盛んで、学校としても力を入れていく印象がありました。が、むしろ、活動時間の縮減に本気で取り組んできたことを知り、たいへん驚きました。
管理職と運営委員(教務主任、学年主任)が、一人一人の教職員の思いや考えに耳を傾け、進むべき方向性をしっかりと示し、学校全体が同一歩調で働き方改革に取り組みでいる。みんなだからこそ、向かうべき方向に船が進む。そんな様子を知ることができました。

